

博物館にて — 西洋知識の取り入れ方

ソムチャイ・プリーチャシンラパクン

二〇一二年一月から二〇一三年三月まで私はアジア研の客員研究員として日本に滞在した。その間、私は、日本の様々な興味深い場所を訪問する機会に恵まれた。とりわけ東京や近隣の県に存在する数多くの博物館巡りとはとてもおもしろく感じられた。これらの博物館は日本社会の歴史の豊饒さと同時に歴史が経験した悲惨な出来事をもみせてくれる。しかしながら、これら歴史的経験から学ぶのは、単に過去という出来事が起こったのか、ということだけでなくその時代に生きた人びとがどのような思考の在り方をしていたかということも学び取れるのである。

はとくに感銘深い博物館であった。同館は佐原市に立地し、JRで東京から二時間ほどの距離にある。伊能忠敬の業績を記念して設立されたものである。博物館は忠敬の偉業の数々を所蔵している。日本の地図、測量のための道具類、書状類、その他、地図製作の過程を追うことができる様々なものが展示されている。

伊能により日本の正しい形が日本人に紹介されるまでは、ヨーロッパでの日本の形は風説や憶測を元に描かれていた。正確な地理的情報はほとんどなかった。また日本人は書く目的に応じて——宗教的な背景をもとに、そして時代の違いに応じて——日本を様々な形に描いた。

伊能忠敬は五〇歳にして天文学の学習をはじめた。そして一七年間をかけて日本中をくまなく調査して、日本地図を完成させた。そして江戸で七三歳の人生を閉じた。

興味深いことに、シャム（後のタイ）における近代の最初の地図はラーマ五世の代（日本の明治期）に作られたのだが、タイの国王は近代的な地

図製作のための調査、製作に当たり西洋人を雇った。特にシャムとラオスおよびカンボジアとの国境については正確な地図が求められた。この事実には西洋の知識を社会に取り入れる際に、日本とタイとは取り込みの仕方に違いがあることを示している。日本の人びとは西洋の知識を自分たち自身で読み解き日本語に変換しなければならなかった。これに対しシャムでは西洋の知識へのアクセスはエリート層や高位な支配者層だけに限られていた。そのため、タイ社会においては「西洋知識の偉大なる父」が幾人も現れた。たとえば、「科学の父」はラーマ六世、「司法制度の父」はラーマ五世の息子、「タイ史の父」はラーマ五世の弟という具合に。この点が日本と大いに異なる点である。日本では市井の人々が知識を得、それを社会に広めることができた。

これは西洋の知識を自分たちのものへと取り込む方法や社会における人びとの姿勢が両国の間で相違していることの反映だといえよう。

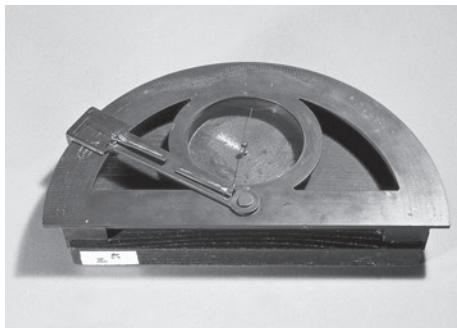
（原文英語。編集部和訳）



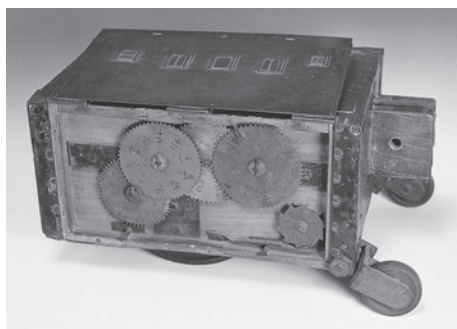
高象限儀中
(千葉県香取市
伊能忠敬記念館所蔵)



高杖先方位盤 (千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵)



高半円方位盤 (千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵)



量程車 (千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵)

Somchai Preechasinlapakun

Faculty of Law
Chiang Mai University
前アジア経済研究所 海外客員研究員